



Title	ゴーシタ長者前世譚 : Udena Vatthu (ウデーナ王物語) より
Author(s)	山口, 周子
Citation	印度民俗研究. 2015, 14, p. 3-19
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/51414">https://hdl.handle.net/11094/51414</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ゴータ長者前世譚

—*Udena Vatthu* (ウデーナ王物語) より—

山口 周子



## 1. はじめに

ウデーナ<sup>1</sup>王は、紀元前六-五世紀ごろにかけて、主としてインド北部から中央アジアの一部にかけて存在したインド十六大国<sup>2</sup>のひとつ、ヴァンサ国（現在のウツタル・プラデーシュ州南部に相当する地域を中心とし、マガダ国とカーシー国の西にあった国）<sup>3</sup>の王である。彼は、ブッダと同時代の人物であり、仏教を保護したと伝えられる<sup>4</sup>。また、初めて仏像の作成を命じた人物とも伝えられるのだが<sup>5</sup>、実際にブッダ

<sup>1</sup> *Udena*. サンスクリット語では「ウダヤナ (*Udayana*)」。

<sup>2</sup> *P. Solasamahājanapada*; *Skt. Sodaśamahājanapada*.

<sup>3</sup> *P. Vamsa*; *Skt. Vatsa*. ヴァンシャ (*Skt. Vamśa*) とも称される。

<sup>4</sup> ただし、もともと彼は粗暴な性格で、仏教教団に対してもあまり好意的ではなかった。自身の後宮の女性らがブッダやその弟子たちに対して熱狂的な信仰をもっていたため、彼女らと出家者らの間に不適切な親密さがあるのではないかと疑っていたこともある。そういった彼が仏教に帰依した経緯については、大きく分けて二つの所伝がみられる。ひとつは、すでにブッダに深く帰依し、慈悲

(*Skt. maitra P. metta*) に習熟していた妃サーマーヴァティー (*Skt. Śyāmavatī P. Sāmāvatī*) の影響、もうひとつは、ブッダの高弟のひとりであるピンドーラバーラドヴァージャ (*Skt., P. Piṇḍolabhāradvāja*) に感化されたというものである。(cf. 森章司・本澤綱夫, 「コーサンビーの仏教」, 原始仏教聖典』モノグラフ 14, 中央学術研究所, 2009, pp. 170-220.)

※ピンドーラバーラドヴァージャ: 『アングッタラ・ニカーヤ

(*Āṅguttaranikāya*)』や法賢 (11 世紀) が訳出した『仏説阿羅漢功德經』[T. 126]

では、説法において大変雄弁な人物として伝えられている (*etaḍ aggaṃ*

*bhikkhave mama sāvakānaṃ bhikkhūnaṃ ... sīhanādīkānaṃ yadidaṃ*

*piṇḍola-bhāradvājo* [Richard Morris (ed.), *Ekanipāta, Dukanipāta, and*

*Tikanipāta: The Āṅguttara Nikāya Part 1*, London: Published for the Pāli Text Society by Oxford University Press, 1885, p.23] 復有聲聞説法之音如師子吼。

賓度羅拔囉墮舍苾芻是 [Vol. 2, 831b1—2])。

また、玄奘 (7 世紀) が訳した『大阿羅漢難提蜜多羅所説法住記』[T. 2030] では「十六羅漢」の筆頭にあげられる (所説十六大阿羅漢。我輩不知其名何等。慶友答言。第一尊者名賓度羅跋囉惰闍。[Vol. 49, 13a7—9])。

我が国では、「おびんずるさま」とも称され、病平癒のための「なでぼとけ」として信仰を集める。

<sup>5</sup> 例えば、『増壹阿含經』 [T 125] には、次のような話が記されている。ブッダが天界に説法に出かけて、暫くのあいだ地上を留守にした際、ウデーナ王はブッダに会えないことを思い煩い、ついに鬱状態に陥ってしまう。そこで、大臣たちは、彼を快復させようと、ブッダの姿を模した像をつくるようにと進言した。王はすぐさまその言を受け入れ、腕のよい職人たちを呼び寄せ、香木で仏像を作製させた。

(……群臣白王。云何以愁憂成患。其王報曰。由不見如來故也。設我不見如來者便當命終。是時群臣便作是念。當以何方便使優填王不令命終。我等宜作如來形像。是時群臣白王言。我等欲作形像。亦可恭敬承事作禮。時王聞此語已。歡喜踊躍不能自勝。告群臣曰。善哉卿等所説至妙。群臣白王。當以何寶作如來形像。是時王即勅國界之內諸奇巧師匠。而告之曰。我今欲作形像。巧匠對曰。如是大王。是時優填王即以牛頭栴檀。作如來形像高五尺。[Vol. 2, 706a7-18])

の姿が「仏像」という形で表現され始めたのは仏滅後数百年経ってからのことなので<sup>6</sup>、この所伝に関しては後世の作成と考えるのが妥当であろう。

最も古い原始仏教聖典のひとつ『ダンマパダ (*Dhammapada*)』<sup>7</sup>の注釈書『ダンマパダ・アッタカター (*Dhammapada Aṭṭhakathā*)』<sup>8</sup>(以下 DPA とする)には、この王にまつわる複数の物語が収集され、「ウデーナ・ヴァットウ (*Udena Vatthu*: ウデーナ王物語)」(以下 UVt とする)としてまとめられている。各物語の大まかな内容とその並びは、以下のとおりである。

- (1) ウデーナ王の誕生とその経緯、および彼が王位を得るまでの物語
- (2) ウデーナ王の義父のひとりゴーシタ長者の前世譚
- (3) ゴーシタ長者の半生
- (4) ゴーシタ長者の養女サーマーヴァティーの生い立ちとウデーナ王の結婚
- (5) ウッジェーニ国王女ヴァースラダッターとウデーナ王の馴初めと結婚
- (6) バラモンの娘マーカンディヤーとウデーナ王の出会いと結婚
- (7) サーマーヴァティー妃とブッダに対するマーカンディヤー妃の策略、およびウデーナ王の帰仏
- (8) サーマーヴァティー妃とその侍女五百人の死、およびマーガンディヤー妃の刑死

---

なお、四、五世紀作成とみられるガンダーラの彫刻にも、この逸話をモチーフとした像が残されている (cf. 『パキスタン・ガンダーラ彫刻展』(図録), 東京: 東京国立博物館, 2002, p. 51.)。

<sup>6</sup> ブッダを人の姿で表現し始めたのは紀元前後のことであり、それまでは仏塔や菩提樹などで象徴的に表されていた。(cf. Jacques de Guerny, *Buddhapāda: Following the Buddha's Footprints*, Bangkok: Orchid Press, 2013 (電子書籍), 1.1 General Introduction および 1.4 Buddhist Arts and the *Buddhapāda* の箇所。)

<sup>7</sup> 『ダンマパダ』は「かなり古いテキスト (中村, 1999)」とされる。その成立については様々な論議があるが、漢訳テキスト(『法句經』 [T 210])の年代から考えて、少なくとも紀元前三世紀以前に遡ることができる。[cf. 中村元 (訳), 『ブッダの真理のことば・感興のことば』, 東京: 岩波書店, 1999 (初版 1978), pp. 376—378; 鎌田茂雄 他 (編), 『大蔵経全解説大事典』, 東京: 雄山閣出版, 平成 10 年 (1998; 初版 平成 8 年), pp. 61—62.]

<sup>8</sup> 上座部仏教の学僧ブッダゴーサ (*Buddhaghosa*: 5 世紀)の著作と伝えられるが、当時すでに存在していたシンハラ語のテキストをパーリ語訳した可能性も指摘されている。[cf. Bimala Churn Law, *The Life and Work of Buddhaghosa*, New Delhi: Pilgrims Book, 1997 (first published: Calcutta, 1923), p. 80 ff.]

なお、物語 (2) では『ダンマパダ』第百三十七から百四十偈<sup>9</sup>、物語 (7) では第三百二十から三百二十二偈<sup>10</sup>、物語 (8) では二十一から二十三偈<sup>11</sup>が、それぞれの物語の内容に関連する教訓として示される。

<sup>9</sup> *yo daṇḍena adaṇḍesu appaduṭṭhesu dussati /* 罪科なく、悪意のない人々を暴悪さによって苛む者は

*dasannam aññatarāṃ ṭhānaṃ khippam eva nigacchati //137//* 早々に [次の] 十のうちのいずれかの状況に陥る。

*vedanaṃ pharusāṃ jāniṃ sarīrassa ca bhedaṇaṃ /* 激痛、虐待、そして身体の傷害、

*garukaṃ vāpi ābādhaṃ cittakkhepaṃ va pāpuṇe //138//* またもしくは、重篤な病、または正気を失うことになろう。

*rājato vā upassaggāṃ abbhakkhānaṃ ca dāruṇaṃ /* あるいは、王による迫害や、残酷な誹謗、

*parikkhayaṃ va nātīnaṃ bhogaṇaṃ va pabhaṅguṇaṃ //139//* もしくは血族の根絶、はたまた財の喪失、

*athavassa agārāni aggī dāhati pāvako /* あるいはまた、その人の家屋を燃え盛る焰が焼き払う。

*kāyassa bhedaṃ duppañño nirayaṃ sopapajjati' ti //140//* [そうして] その愚かな人は、死んでから地獄へと赴く。

[原典テキスト：H.C. Norman (ed.), *The Commentary on Dhammapada* vol. 1 part II, London: Published for the Pāli Text Society by Oxford University Press, 1909, pp. 179-180; O. von Hinüber and K. R. Norman (ed.), *Dhammapada*, Oxford: Pāli Text Society, 1994, pp. 38-39.]

<sup>10</sup> *ahaṃ nāgo va saṅgāme cāpāto patitaṃ saraṃ / ativākyan titikkhissāṃ, dussīlo hi bahujjano //320//*

私は、戦場において放たれた矢に当たった象のように

心ない言葉に耐えよう。なんとなれば、大衆とは質が悪いものだから。

*dantaṃ nayanti samitiṃ, dantaṃ rājābhirūhati / danto seṭṭho manusessu yo 'tivākyan titikkhati //321//*

飼いならされた [象] を [人々は] 戦に連れて行く。飼いならされた [象] には王が乗るものである。

心ない言葉に耐える人とは[自身を] 制御した人であり、人々のなかで最も優れている。

*varam assatarā dantā, ājānīyā ca sindhavā / kuñjarā ca mahānāgā, attadanto tato varam' ti //322//*

[戦場において] 至上のもの。飼いならされた騾馬、シンドウ (インダス河流域) 産の血統馬、クンジャラなる大象。[しかし、] 自己を制御した人は、それよりも優れている。

[原典テキスト：H. C. Norman (1909), pp. 212-213; O. von Hinüber and K. R. Norman (1994), p. 90.]

<sup>11</sup> *appamādo amatapadaṃ, pamādo maccuno padaṃ / appamattā na mīyanti, ye pamattā yatha matā // 21*

[自らの想いに] 注意深くある人は不死への道に [あり]、[それを] 怠ける人は死への道に [ある]。

享楽に耽る者らは死者と変わらぬが、[自らの想いに] 思慮深い人々が [本当の意味で] 死ぬ事はない。

*etaṃ viśesato nātva appamādamhi paṇḍitā / appamāde pamodanti ariyānaṃ gocare ratā // 22*

このことをはつきりと理解し、賢者らは [自らの想いに] 注意深い [状態] にある。

彼らは、注意深くある [あり方] を楽しむのである、聖なる人々の境地を楽しむ人とし

本稿は、上記リストのうち (2) の物語——ウデーナ王の義父のひとりであり、ブッダに苑林を寄贈するほどの大素封家であったゴーシタ長者 (*Ghositastṭhin*)<sup>12</sup>の所伝を、テキスト原典<sup>13</sup>と対照する形で紹介したい。

## 2. UVt におけるゴーシタ長者前世譚——犬になった男・天に生まれた犬

ゴーシタ長者は、ウデーナ王が治めるヴァッサ国の首都コーサンビーに在住していた大資産家として伝えられている。彼はブッダに帰依して苑林の寄進も行ったが、その苑林は布施主である彼自身にちなんで「ゴーシタ苑 (*Ghositārāma*)」と称された。ウデーナ王の後のひとりで熱心な仏教徒であった、サーマーヴァティーの養父にあたる人物でもある。UVt は、この人物について、次のような前世譚を伝える。

### 2-1. 犬になった男

*Ajitaratṭhe pana dubbhikkhe jīvitum asakkonto eko Kotūhalako nāma manusso. Kāpiṃ nāma taruṇaputtam Kāliṃ nāma bhariyam ādāya,*

---

て。

*te jhāyino sātatikā niccaṃ dalhaparakkamā / phusanti dhīrā nibbānaṃ  
yogakkhemaṃ anuttaram' ti //23//*

忍耐強く精神統一する彼らは、常に気力に満ちている。

聡明なる人々は、涅槃という最も優れた、完全な安寧に至る。

[原典テキスト: H. C. Norman (1909), p. 228; O. von Hinüber and K. R. Norman (1994), p. 7.]

<sup>12</sup> UVt では、ゴーシタ長者について、彼が長者の地位を得るまでは *Ghosaka*、長者になってからは *Ghosita* としているが、本稿本文では、原則として「ゴーシタ (*Ghosita*)」に統一する。なお、サンスクリット文献である *Divyāvadāna* では、彼の名は *Ghosila* と記されている (cf. Cowell & Neil (ed.), *The Divyāvadāna, A collection of Early Buddhist Legends*, Cambridge: at the University Press, 1886, pp. 529, 531, 541, 575, 576.)。

<sup>13</sup> 原典テキストは、H.C. Norman (1909), pp. 169-174 に拠る。なお、英訳としては以下のものがある。

Eugene Watson Burlingame, *Buddhist Legends: Translated from the Original Pāli Texts of the Dhammapada Commentary Translation of Books 1 and 2*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1921, pp. 252 ff.

E. Hardy, The Story of the merchant Ghosaka (*Ghosaka-seṭṭhi*) in its twofold Pāli form, with reference to other Indian parallels, *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* (1898), pp. 741-764.

*‘Kosambiyam gantvā jīvissāmī’ ti pātheyyam gahetvā nikkhami.  
‘Ahivātakarogena mahājane mārente nikkhamī’ ti pi vadanti yeva.*

また、飢饉となったアジタ国に、生活ができなくなってきたコート  
ゥーハラカというある男がいた。カーピという名の幼い息子と、カー  
リーという名の妻を連れ、「コーサンビーに行って生きながらえよう」  
と旅の備えを携えて [街を] 出た。「流行病（アヒヴェータカ病）で沢  
山の人たちが亡くなってゆくので、[街を] 出た」とも言われている。

*te gacchantā pātheyye parikhīṇe khudābhibhūtā dārakaṃ vahituṃ  
nāsakkhimsu. atha sāmiko pajāpatiṃ āha : ‘bhadde mayam jīvantā puna  
puttaṃ labhissāma, chaḍḍetvā naṃ gacchāmā’ ti. ‘mātuhadayam nāma  
mudukaṃ’ ti ; tasmā sā āha : ‘nāham jīvantam eva puttaṃ chaḍḍetuṃ  
sakkhissāmī’ ti. ‘atha kiṃ karomā’ ti. ‘vārena naṃ vahāmā’ ti. mātā  
attano vāre pupphadāmaṃ viya naṃ ukkhipitvā ure nipajjāpetvā añkena  
vahitvā pitu deti ;*

彼らは行くうちに、旅の備えを使い果たしてしまい、餓えに耐えかね  
て、年端のゆかぬ子どもを運ぶことができなかった。そこで、夫は妻  
に言った。「お前、俺たちが生きていれば、また息子を授かるだろう。  
この子を棄てて行こう」。「母親の心とは情が深いもの」という。それ  
ゆえに、彼女は言った。「生きているのに、息子を棄てることはできま  
せん。」「なら、どうすればよかろう。」「交代で運びましょう」母親は  
自分の番になると、彼を花輪のように抱き上げ、胸にもたせかけると  
腰で [支えて] 運び<sup>14</sup>、父親に渡した。

*tassa taṃ gahetvā ṭhapitaṭhapita-ṭṭhāne chātakato pi balavatarā vedanā  
uppajjati. so taṃ punappunāha : ‘bhadde mayam jīvantā puttaṃ  
labhissāma, chaḍḍema naṃ’ ti. sā pi punappuna paṭikkhipitvā  
paṭivacanaṃ adāsi. dārako vārena parivattiyamāno kilanto pitu-hatthe  
niddāyi ; so tassa niddāyanabhāvaṃ ṇatvā mātaraṃ purato katvā ekassa  
gacchassa heṭṭhā paṇṇasanthare taṃ nipajjāpetvā pāyāsi.*

彼（子ども）を抱えると、彼（父親）には、居る先々で、また餓えよ  
るさらに強烈な苦痛が生じた。彼は、彼女（妻）に繰り返し言った。  
「お前、俺たちが生きていれば息子を授かるだろう。この子を棄てよ

<sup>14</sup> 女性の腰のくびれた部分（骨盤の上）に子どもを座らせ、上半身を胸に凭れさ  
せる体勢を表現していると思われる。

う」。そして、彼女（妻）は [その度に] 繰り返して反論した。幼児は交代で受け渡されているうちに疲れ果てて、父親の手の中で眠ってしまった。彼（父親）は、彼（息子）が眠っているのに気付くと母親を先に行かせ、とある茂みの下の木の葉の褥に彼を横たえて、立ち去った。

*mātā nivattitvā oloketī puttāṃ adisvā, ‘sāmi kuhiṃ me putto’ ti pucchi. ‘ekassa me gacchassa hetṭhā nipajjāpito’ ti. ‘sāmi mā maṃ nāsaya, puttāṃ vinā jīvitum na sakkhissāmi, ānehi me puttāṃ’ ti uraṃ paharitvā paridevi. atha naṃ nivattitvā ānesi.*

母親は [方々を] 見回しながら引き返して来たが、息子が見当たらないので「あなた、私の子はどこにいるの」と尋ねた。「俺が、ある茂みの下に寝かせてきたよ。」「あなた、私を殺さないで。[あの] 子なしでは、生きて行けないわ。[あの] 子を持って来てちょうだい」と、胸を打って泣き叫んだ。そこで、[父親は] 彼（息子）のところに引き返して、連れて来た。

*iti so ettake ṭhāne puttāṃ chaḍḍetvā tassa nissandena bhavantare sattavāre chaḍḍito, ‘pāpakammaṃ nāṃ’ etaṃ appakaṃ ’ti na avamaññitabbaṃ. te gacchantā ekaṃ gopālakulaṃ pāpuṇṇimsu. Taṃ divasaṃ gopālakassa dhenumaṅgalaṃ hoti ; gopālakagehe nibaddhaṃ eko paccekabuddho bhuñjati, so taṃ bhojetvā maṅgalaṃ akāsi ; bahu pāyāso paṭiyatto hoti. Gopālako te āgate disvā, ‘kuto āgat’ atthā ti pucchitvā, sabbaṃ pavattiṃ sutvā mudujātiko kulaputto tesu anukampaṃ katvā pahūtena sappinā pāyāsaṃ dāpesi.*

この様に、彼はただ一度の機会に息子を棄てたのだが、その [行為の] 結果として輪廻にいるうちに七度、棄てられた。罪ある行いというもの「こんなこと、たいしたことではない」と軽く考えてはならない。

彼らは [旅を] 行くうちに、とある牛飼いの家に辿り着いた。その日、牛飼いの家の牝牛のお祝いがあった。牛飼いの家には、いつもひとりの独覚仏<sup>15</sup>が [やって来てお布施として出された] 食事を食べていた。彼（牛飼い）は、彼（独覚仏）に [食事を] 食べさせてから [牛

<sup>15</sup> *paccekabuddha*. 「辟支仏」、「縁覚仏」とも訳される。師を持たず、十二縁起（原始仏教ですでに説かれた教え。「無明（無知）」を源として「苦」が生じる一つまり、迷いにある生き物が輪廻世界に留まり続けるメカニズムを解き明かしたものを観ずることや、その他の縁によって自ら悟った人のこと。「仏 (*buddha*)」とは異なり、世俗の人らに法を説くことはない。

の] お祝いをした。[そのお祝いのために] 沢山の粥が準備されていた。牛飼いは、彼らがやって来たのを見て、「お前さんたちは、どこからおいでなされたのかね」と尋ね、すべての経緯を聞き [た。そして、] 同情した [この] 善良な男は彼らを気の毒に思い、[家人にいつけて] たっぷりのギー（精製したバター）を添えた粥を与えさせた。

*bharyā 'sāmi tayi jīvante ahaṃ jīvāmi nāma, dīgharattaṃ ūnodaro 'si, yāvadatthaṃ bhuñjāhi' ti sappiṃ tadabhimukhañ ñeva katvā attanā mandasappiṃ <sup>16</sup> thokam eva bhuñji. itaro <sup>17</sup> bahum bhuñjitvā satt-aṭṭha-divase chātātāya āhāraṇhaṃ chinditum nāsakki.*

妻は、「あなた、あなたが生きておられれば私も生きていけます。あなたは長い間、お腹が空いていましたね。お好きなだけお食べなさい」と、ギーを彼の前において、自分はギーの [上にできる] クリームをわずかばかり口にした。憐れな男は、たらふく食べたのだが、七、八日間におよぶ餓えのせいで、食物への渴望を断ち切ることはできなかった。

*gopālako tesam pāyāsam dāpevā sayam bhuñjitum ārabhi. Kotūhalako taṃ olokento nisīditvā heṭṭhāpīṭhe nisinnāya sunakhiyā gopālakena vaḍḍhetvā diyyamānaṃ pāyāsapiṇḍam disvā 'dhaññā vatāyaṃ sunakhī yā nibaddham evarūpaṃ bhojanaṃ labhatī' ti cintesi.*

牛飼いは、彼らに粥をあたえさせてから、自ら [も食事を] 食べ始めた。コートウーハラカはそれを見ながら座していたが、牛飼いに飼われて [いる] 椅子の下に座っていた雌犬に一塊の粥が与えられているのを見て「なんとまあ、この雌犬ときたら幸せなやつだ、こいつはいつもこんなエサをもらえるのだ」と思った。

*so rattibhāge taṃ pāyāsam jīrāpetum asakkonto kālaṃ katvā tassā sunakhiyā kucchismiṃ nibbatti. ath' assa bharyā sarīrakiccaṃ katvā, tasmim eva gehe bhatim katvā taṇḍulanālim labhitvā pacitvā paccekabuddhassa patte paṭṭhāpetvā, 'dāsassa vo pāpuṇantū' ti vatvā, cintesi : 'mayā idh' eva vasitum vaṭṭati nibaddham ayyo idhāgacchati deyyadhammo hotu vā mā vā devasikaṃ vandantī veyyāvaccam karonī*

<sup>16</sup> *sappimaṇḍa* に同じとみなす。

<sup>17</sup> *ittara* に同じとみなす。

*cittam pasādentī bahum puññam pasavissāmī’ ti, sā tatth’ eva bhatim karontī vasi.*

彼は、その晩、[食べ過ぎた] 粥を消化できずに亡くなってしまい、その雌犬の胎に生まれ変わった。そこで、彼の妻は葬儀を出して、まさにその家で [働いて] 給金を稼ぐと一筒<sup>ナール</sup>の米を手に入れて調理し、[いつも来ている] 独覚仏の鉢に入れて、「あなた様の下男に届きますように」と言ってから考えた。「こここそが、私にとって住むに相応しいのだわ。いつも聖なる方がここにやってくる。お供えするものがあるがなかろうが、毎日礼拝し、御仕えし、心を鎮めながら沢山の福德を積みましょう。」彼女は、他ならぬその場所で給金を稼ぎながら住まいした。

*sā pi kho sunakhī chaṭṭhe vā sattame vā māse ekam eva kukkuram vijāyi. gopālako tassa ekadhenuyā khīram dāpesi, so na cirass’ eva vaḍḍhi. ath’ assa paccekabuddho bhuñjanto nibaddham ekam bhatta-piṇḍam deti, so bhatta-piṇḍam nissāya paccekabuddhe sineham akāsi.*

そして、かの雌犬は、六、七ヶ月するとただ一匹だけ [子] 犬を産んだ。牛飼いは、そいつに、一匹の牝牛に乳を与えさせた。彼（子犬）は、あっという間に大きくなった。ところで、あの独覚仏は食事をしながら、いつも一塊のご飯を [この犬に] 与えていた。彼（犬）は一塊のご飯のせいで、独覚仏のことを慕っていた。

*gopālako pi nibaddham dve vāre paccekabuddhassa upaṭṭhānam yāti, gacchanto pi antarāmagge vālamiga-ṭṭhāne daṇḍena gacche ca bhūmiyañ ca paharivā ‘sū sū’ ti tikkhattum saddam katvā vālamige palāpesi. sunako pi tena saddhim gacchati. so ekadivasam paccekabuddham āha : ‘bhante yadā me okāso na bhavissati, tadā imam sunakam pesessāmi ; imassa pahitasaññāṇenāgaccheyyāthā’ ti.*

そして、牛飼いはいつも、[一日に] 二度、独覚仏の接待に行くのだった。また、道中を歩きながら猛獣の出る場所では、杖で茂みや地面を叩いて「スー、スー」と三度声を上げ、猛獣を近づけないようにしていた。犬も彼と一緒にいった。

彼はある日、独覚仏に言った。「尊き方よ、私に [お伺いする] 時間がないときは、この犬を遣わします。こいつが遣わされたことを合図

に、[うちに] いらしてください」。

*tato paṭṭhāya anokāsadvase ‘gaccha tāta, ayyam āhehi’ ti sunakham pesesi, so ekavacanen’ eva pakkhanditvā sāmikassa gacchapothona-bhūmipothona-ṭṭhāne tikkhattum bhussitvā tena saddena vālamigānam palātabhāvam ṇatvā, pāto va sarīra-paṭijagganam katvā paṇṇasālam pavisitvā nisinnassa paccekabuddhassa vasana-ṭṭhānam gantvā paṇṇasāladvāre tikkhattum bhussitvā attano āgatabhāvam jānāpetva ekamantaṃ nipajjati.*

それからというもの、[牛飼いは、独覚仏のもとを訪れる] 時間がない日には「お前、行っておいで。聖なる方をお連れしておくれ」と、犬を遣いに出した。彼（犬）は、[その] 一言だけで飛び出して行き、主人が叩いていた茂みや、叩いていた地面のところで三度吠えて、その声で猛獣達が遠ざかっていることを確認し [た。そして、] 早朝、身支度をして草庵に入り、座した独覚仏の住まいに行き、草庵の入口のところで三度吠えて自分がやって来たことを知らせると、一隅に横たわった。

*paccekabuddhe velam sallakkhetvā nikkhante bhussanto purato purato gacchati. antarantarā paccekabuddho taṃ vīmaṃsanto aññaṃ maggaṃ paṭipajjati, ath’ assa purato tiriyaṃ ṭhatvā bhussitvā itara-maggaṃ eva nam āropeti. ath’ ekadivasam aññaṃ maggaṃ paṭipajjitvā tena tiriyaṃ ṭhatvā vāriyamāno pi anivattitvā sunakham pādena apanuditvā pāyāsi. sunako tassa anivattana-bhāvam ṇatvā nivattitvā nivāsanakaṇṇe ḍamsitvā ākaḍḍhanto itaramaggaṃ eva nam pāpesi. evaṃ so tasmim balavasineham uppādesi.*

独覚仏が時間を見計らって出発すると、[犬は] 吠えながら ぴたりと前について進んだ。時折、独覚仏は彼（犬）を試して [わざと] 他の道に入って行った。すると、[犬は] 彼（独覚仏）の前で通せんぼうをして吠え、もう一方の [本来の行き先である] 道へと彼を引き戻すのだった。さてある日、[独覚仏がわざと] 別の道に進んで行き、そこで [犬が] 通せんぼうして [道を] 塞いでいるというのに、[独覚仏は] 引き返さず、犬を脚で押しつけて先に進んだ。犬は、彼が引き返さないのを知って、戻ってくると、衣の端に噛み付いて引っ張りながら [本来行くべき] もうひとつの道へと、彼を連れ戻した。こんなふうに、

彼（犬）は彼（独覚仏）のことが大好きだった。

*aparabhāge paccekabuddhassa cīvaram̐ jīri ; ath' assa gopālako cīvara-vatthāni adāsi. tam enam̐ paccekabuddho āha : 'āvuso cīvaram̐ nāma ekakena dukkaram̐ kātum̐, phāsukaṭṭhānam̐ gantvā kāressāmī' ti. 'idh' eva bhante karothā' ti. 'na sakkā āvuso' ti. 'tena hi bhante mā ciram̐ bahi vasitthā' ti. sunakho tesam̐ katham̐ suṇanto aṭṭhāsi.*

ほどなくして、独覚仏の衣がぼろぼろになった。そこで、牛飼いは彼に衣一式 [を調える材料] を与えた。すると、独覚仏は彼に言った。「友よ、衣ってのは一人ではなかなか作れないもんだ、適当な処に行つて作ってもらう事にするよ。」「尊い方よ、ここでお作りなさいませ」「いや、友よ、無理だよ」「でしたら、尊い方、長く外泊なさいませんように」。犬は、彼らの話を聞きながらじっとしていた。

*paccekabuddho 'tiṭṭha upāsakā' ti gopālakam̐ nivattetvā vehāsam̐ abbhuggantvā Gandhamādanābhimukho pakkāmi. sunakhassa tam̐ ākāsenā gacchantam̐ disvā huṅkaritvā ṭhitassa tasmim̐ cakkhupatham̐ vijahante vijahante hadayam̐ phalitam̐.*

独覚仏は、「待っていてくれたまえ、君」と、牛飼いをさがらせると、虚空に飛び上がってガンダマーダナ<sup>18</sup>に向かって旅立った。犬は、彼が空を飛んで行くのを目にすると、吠えて突っ立っていたが、彼が [自分の] 視界から消えて行くと、 [悲しみのあまりその] 心臓は破れてしまった。

*tiracchānā kira nām' ete ujujātikā honti akuṭṭilā, manussā pana aññam̐ hadayena cintenti, aññam̐ mukhena kathenti ; ten' evāha : 'gahanam̐ h' etam̐ bhante yad idam̐ manussā, uttānakam̐ h'etam̐ bhante yad idam̐ pasavo'<sup>19</sup> ti.*

<sup>18</sup> *Gandhamādanagiri*. 漢訳では「香酔山」と称される。仏教の世界観では、我々の住む世界を「瞻部洲 (*Jambudīpa*)」とするが、香酔山は、この瞻部洲の北端に位置する山とされる。

<sup>19</sup> `gahanam̐ h' etam̐ bhante ..... yad idam̐ pasavo'. *Majjhima Nikāya (Kandaraka Sutta)* に同一の一節が見られる。

cf. V. Trenckner (ed.), *The Majjhima Nikāya* vol.1, Oxford: Pāli Text Society, 1993 (first published in 1888), p. 340.

Piya Tan (Trans.), *Kandaraka Sutta*,  
<http://dharmafarer.org/wordpress/wp-content/uploads/2010/02/32.9-Kandaraka-S-m51-piya.pdf> (Dec. 27, 2014)

これらの畜生というのは、[気持ちの] まっすぐな生き物で、実直だという。一方、人は心では [外面と] 違うことを考えるものだし、口では [本心と] 違う事を語るものである。それ故に、このように言うのだ、「実に、尊き方よ、この測り難きは人間でございます。実に、尊き方よ、この分かり易きは畜類でございます」と。

## 2-2. ゴーサカ <sup>デーヴァフツタ</sup>天子の誕生と人界への転生

*iti so tāya ujudiṭṭhitāya akuṭilatāya kālaṃ katvā Tāvatiṃsa-bhavane nibbatto accharāsaḥassa-parivuto mahāsampattiṃ anubhoti. tassa kaṇṇamūle mantayantassa saddo soḷasa-yojana-ṭṭhānaṃ pharati, pakatikathāya saddo pana sakala-dasayojana-saḥassaṃ devanagaram chādeti, ten' ev' assa Ghosaka-devaputto ti nāmaṃ ahoṣi. 'kassa pan' esa nissando' ti; paccekabuddhe pemena huṃkaraṇassa.*

この様に、彼（犬）はその誠実さと実直さゆえに死んでから、三十三天<sup>20</sup>に生まれ変わって、千人もの天女に囲まれ、非常な幸福を味わった。彼がささやくと、声は十六由旬に渡って広がった。そして、普通に [話す] 話の声は、一万由旬にも及ぶ神々の街全体に響き渡った。

まさにそれゆえに、彼は「ゴーサカ（声を上げる）<sup>デーヴァフツタ</sup>天子」と呼ばれていた。「しかしこれはいかなる訳か」というなら、[前世で] 独覚を慕って吠えたからである。

*so tattha na ciraṃ ṭhatvā cavi. devalokato hi devaputto<sup>21</sup> āyu-kkhaṇena puñña-kkhaṇena āhāra-kkhaṇena kopenāti catūhi kāraṇehi cavanti.*

彼は、そこに長く留まることはなく、[死んで次の生まれへと] 移った。

実に、天子は、寿命が尽きることによって、徳が尽きることによって、食料が尽きることによって、怒りによって、といった四つの原因で [死に、次の生まれへと] 移るものである。

<sup>20</sup> *Tāvatiṃsa-bhavana*. 「忉利天」とも訳される。仏教の世界観における天界のひとつ。世界の中心とされる須弥山の頂上にあり、帝釈天が住まう所でもある。

<sup>21</sup> H. C. Norman (1909), p. 173, footnote13 にも異読としてあげられているとおり、複数形 (*puttā*) とする方がこの文章の動詞には適している。

*tattha yena bahuṃ puññaṃ kammaṃ kataṃ hoti, so devaloke uppajjitvā yāvatāyukam̐ thatvā uparūpari nibbattati ; evaṃ āyu-kkhayena cavati nāma. yena parittam̐ puññaṃ kataṃ hoti, tassa rājakotṭhāgāre pakkhittam̐ ticatunāḷimattam̐ dhaññaṃ viya antarā va tam̐ puññaṃ khīyati, antarā va kālam̐ karoti, evaṃ puñña-kkhhayena cavati nāma.*

そこで沢山の福德となる行いをなすなら、その者は、天界に生まれでてからそれなりの寿命のあいだ [天界で] 留まり、上へ上へと生まれ変わる<sup>22</sup>。このような [死に方を] 「寿命が尽きる事によって移る」という。積んだ福德が少なければ、その者の [福德は] 王の蔵に投げ込ま

まれた [わずか] 三、四筒<sup>ナール</sup>ばかりの穀物のように、途中でその福德がついてしまい、[天界での寿命の] 途中で亡くなってしまう。このような [死に方を] 「福德が尽きることで移る」というのである。

*aparo kāmaguṇe paribhuñjamāno satisammohena āhāram̐ aparibhuñjitvā kilanta-kāyo kālam̐ karoti, evaṃ āhāra-kkhhayena cavati nāma. aparo pi aparassa sampattim̐ asahanto kujjhivā kālam̐ karoti evaṃ kopena civati nāma.*

もうひとつは、快樂に耽っているうちに記憶が混乱し、食物を食べずに身体が衰弱し、死んでしまう。このような [死に方を]、「食物が尽きることで移る」という。さらにもうひとつは、他人の榮華にがまんできず [嫉妬のあまり] 憤って死んでしまう。このような [死に方を] 「怒りによって移る」というのである。

*ayaṃ pana kāma-guṇe paribhuñjanto muṭṭha-ssati hutvā, āhāra-kkhhayena cavi, cavitvā ca pana Kosambhyam̐ nagara-sobhiniyā kucchismiṃ paṭisandhim̐ gaṇhi.*

さて、この [ゴーサカ天子] は快樂に耽っているうちに、記憶を失い、食べ物<sup>22</sup>が尽きる事で [三十三天から別の世界へ] 移った。そうし

---

<sup>22</sup> 仏教では、天界は重層構造をなしていると考えられている。まず大きく分類すると、下層から順に「欲界 (Kāmadhātu)」、「色界 (Rūpadhātu)」、「無色界 (Arūpadhātu)」となり、上層にいくほど欲望と物質のない世界となってゆく。また、これらの各「界」内もいくつかの階層に分かれており、どこに転生するかは徳の高さで決まる。ちなみに、犬が「ゴーサカ天子」として生まれ変わった三十三天は、「欲界」の下から二番目にあたる。

て移って、コーサンビーの高級娼婦の胎に生まれ変わった。

### 3. 関連話と今後の展望

ここまでの、ゴーシタ長者の前世譚である。この後、物語はゴーシタ長者の半生、つまり、このヴァッサ国首都コーサンビーの高級娼婦に生まれた少年が長者となってゆく経緯を描く。なお、上に示した物語中でも述べられていたとおり、彼は養育者に恵まれない。生まれてすぐに実母に棄てられ<sup>23</sup>、その後、養父となった長者には、相続の邪魔になるという理由で何度も葬り去られようとする。それでも、犬であった時に独覚仏を慕っていた功德のおかげで度重なる危機を逃れ、ついに長者の地位を相続するのである<sup>24</sup>。

ところで、ここで紹介したゴーシタ長者の話も含め、ウデーナ王に関する物語は、北伝仏教<sup>25</sup>テキスト、つまり、漢文やチベット語、モンゴル語などによる仏教聖典でも伝えられている。ただし、それらの物語は、UVt に描かれるものとは異なる内容となっている。さらに、UVt が、一人の人物を軸としたオムニバス形式をもっているのに対し、北伝仏教聖典におけるウデーナ王関連の物語は、彼にまつわるさまざまなエピソードが個別に伝えられている。例えば、『仏説優填王經』<sup>26</sup>は、わずか一巻の短い経典だが、UVt (6) と (7) の物語、つまり、ウデーナ王がマーカンディヤー妃を娶った経緯と、帰仏に至る経緯が折衷された内容といえる。また、漢語、およびチベット語やモンゴル語にも訳出されている『根本説一切有部毘奈耶』には、本稿で取りあげた (2) に類する物語が、ゴーシタ長者だけでなく、ブッダやウデーナ王の前世をも語るものとして記されている<sup>27</sup>。

---

<sup>23</sup> 「なんとなれば、都市の高級娼婦たちは娘を養育するのであって、息子を [養育することは] ないのだから (*nagarasobhiniyo hi dhūtaram paṭijagganti, na puttam* [H. C. Norman (1909), p. 174])」とあることから、彼は当時の花街の慣習によって棄てられたことが窺える。

<sup>24</sup> 彼が長者の地位を得るまでの経緯は、H. C. Norman (1909), pp. 174-187 にある。

<sup>25</sup> インドから中央アジア、中国大陸および朝鮮半島を経て日本へと伝播した仏教と、インドからチベット、モンゴル、現ロシア領の一部（トヴァ共和国、カルムイク共和国、ブリヤート共和国）へと伝播した仏教の総称。これに対して、スリランカを経て東南アジア一帯に広まっている上座部系仏教を「南伝仏教」という。

<sup>26</sup> 『佛説優填王經』 [T 332: Vol. 12, 70c9—72b11].

<sup>27</sup> 漢語訳：『根本説一切有部毘奈耶』第六十四巻の一部 [T1442; Vol.23,883c3—19].

こういった点を鑑みると、南伝仏教テキストと北伝仏教テキストの双方にわたってウデーナ王に関する物語を詳らかに調べ、比較する作業は、仏教説話の伝播状況を明らかにするうえでの一助となるだろう。特に、(2) については、『根本説一切有部毘奈耶』だけでなく、仏教説話集成のひとつである『賢愚経』にも類話<sup>28</sup>があることが分かった。今後は、それらのテキストの内容も考察対象に取り入れ、ウデーナ王の物語の変遷と伝播をさらに明らかにすることを目指したい。

#### <略号一覧>

D	西藏大蔵経 デルゲ版
DPA	<i>Dhammapada Aṭṭhakathā</i>
P	西藏大蔵経 北京版
P.	パーリ語
Skt.	サンスクリット語
T	大正新脩大蔵経
UVt	<i>Udeva Vatthu</i>

#### <参考文献>

- Burlingame, Eugene Watson, *Buddhist Legends: Translated from the Original Pāli Texts of the Dhammapada Commentary Translation of Books 1 and 2*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1921.
- Cowell, E.B., & Neil, R.A. ed., *The Divyāvadāna, A collection of Early Buddhist Legends*, Cambridge: At the University Press, 1886.
- de Guerny, Jacques, *Buddhapāda: Following the Buddha's Footprints*, Bangkok: Orchid Press, 2013 (電子書籍) .
- Hardy, E., *The Story of the merchant Ghosaka (Ghosaka-seṭṭhi) in its*

---

チベット語訳：'Dul ba rnam par 'byed pa 第七十三巻の一部 [P1032; Te 139a4—140a6 D3; Ņa 148a3—149a7].

モンゴル語訳：Nomuyadqaqui teyin böged ilγayči 第七十三巻の一部 [Te 202b29—204b25].

<sup>28</sup> 『賢愚経』（散檀寧品 第二十九 丹本爲二十七）[T 202: Vol. 4, 386a5—387a26].

- twofold Pāli form, with reference to other Indian parallels, *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 1898, pp. 741-764.
- Law, Bimala Churn, *The Life and Work of Buddhaghosa*, New Delhi: Pilgrims Book, 1997 (first published: Calcutta, 1923).
- Lokesh Chandra, ed., *The Mongolian Kanjur*, vol. 101, New Delhi: Sharada Rani, 1979.
- Morris, Richard, ed., *Ekanipāta, Dukanipāta, and Tikanipāta: The Aṅguttara Nikāya*, Part 1, London: Published for the Pāli Text Society by Oxford University Press, 1885.
- Norman, H.C., ed., *The Commentary on Dhammapada*, vol. 1 part II, London: Published for the Pāli Text Society by Oxford University Press, 1909.
- Piya Tan (Trans.), *Kandaraka Sutta*, <http://dharmafarer.org/wordpress/wp-content/uploads/2010/02/32.9-Kandaraka-S-m51-piya.pdf> (Dec. 27, 2014 電子データ).
- Trenckner, Vilhelm, ed., *The Majjhima Nikāya*, vol.1, Oxford: Pāli Text Society, 1993 (first published in 1888).
- von Hinüber, O. and Norman, K.R. ed., *Dhammapada*, Oxford: Pāli Text Society, 1994.
- 鎌田茂雄 他 (編), 『大藏経全解説大事典』, 東京: 雄山閣出版, 平成 10 年 (1998; 初版 平成 8 年) .
- 中村元 (訳), 『ブツダの真理のことば・感興のことば』, 東京: 岩波書店, 1999 (初版 1978).
- 森章司・本澤綱夫 「コーサンビーの仏教」, 『原始仏教聖典』モノグラフ 14, 中央学術研究所, 2009, pp. 170-220.
- The Nyingma edition of the sDe-dge bKa'-'gyur and bsTan-'gyur*, vol. 3, Oakland, California: Dharma Press, 1981.
- 『パキスタン・ガンダーラ彫刻展』(図録), 東京: 東京国立博物館, 2002.
- 『大正新脩大藏経』(普及版) vols. 2, 12, 23, 49, 東京: 大正新脩大藏経刊行會, 1988, 1988, 1989, 1990.
- 『西藏大藏経』 vol. 42, 東京: 西藏大藏経研究會, 1957.